

IV まとめ

第81次調査の調査成果をまとめると、次のような特徴をあげることができる。

まず第1は、藤原宮期の建物が少なく、また規模も小さい。但し、遺構の重複関係からみて、藤原宮期に少なくとも二時期あることが確認できた。これまでの京内の例では、右京二条三坊東南坪、四条三坊東北・西北坪、七条一坊西南坪、七条三坊西南坪、八条一坊東北坪などにおいて、大規模な建物や、坪をまたぐ堀の存在などが報告され、一方、右京三条三坊東北坪、七条一坊西北坪、七条二坊東南坪では、小規模な建物しか検出されていない。今回の発掘区と周辺部を含めた宮の北方では、桁行5間以上に及ぶような建物は検出されず、柱穴も小さい。したがって、これを一般化すれば、宮から離れた場所では、小規模建物群によって構成される宅地が多いものと予想される。建物の密集度は場所によって違いがあり、右京一条二坊東北坪のように、比較的多くの建物があるところと、右京一条一坊の西北・西南坪のように希薄なところがあることが判明した。当時の藤原京の人口からすると、今回のような建物の希薄な宅地というのが、むしろ一般的なありかただったのではなかろうか。

第2に、今回の発掘区およびその周辺では、工房に関わる遺物が目につくことがあげられる。藤原京内における鑄造関係遺物の量としては、西南坪にあたる第60次調査のそれが際だって多く、さらに遺物の拡がりも今回の西北坪にも及んでいる。このことは、宮の北辺にいくつかの工房群があったことを示唆する。建物の少ない割に井戸が多い点は、それと関わるのかとも推定できるが、いまのところ明確な工房の遺構は確認できていない。工房群がこのあたりに集中していたとすると、それが家内工房的なものか官司との関わりがあるのか、あるいは平城京と同様に、製品の供給先としての市が近接していた可能性があるのかどうか、などは今後の大きな課題である。

第3に、和同開珎の出土がある。藤原京より出土する和同銭は、同期のものであることが確認できれば、最古の鑄造に属するものと言えるが、これまで遺構に伴う和同銭の出土はほとんどなく、藤原宮第75-15次調査の1点だけであった。今回の和同銭も藤原宮期のものである可能性が高いと考えるが、その成分分析の成果が大きな意味をもってくるであろう。

最後に、第65次調査と同様に、遺構の廃絶時期が奈良時代に降る可能性を示した点があげられる。建物の存続時期は明確でないものの、井戸や土坑に若干ながら奈良時代の土器が含まれていることは見逃すことのできない事実である。これは条坊道路が藤原宮の終焉とともに廃絶した点と対照的であり、遷都後もしばらくは宅地ないし、周辺の土地経営との関係で存続したことを示唆する。ただし、奈良時代後期の遺物がないことからすると、ほぼそのころには藤原京域は水田と化したのであろう。今後、なお遷都後の京域の状況を検討する必要がある。